



発行  
NPO法人いわむら一斎塾  
事務局 江戸城下町の館  
〒509-7403  
岐阜県恵那市岩村町317  
TEL 0573-43-5087

義は宜なり。道義を以って本と為す。物に接するの義有り。時に臨むの義有り。常を守るの義有り。変に応ずるの義有り。之を統ぶる者は道義なり。

(言志叢録九七条)

釈意

義、即ち正しき道理は宜(宜しき)に通じて、道義は義の本をなす。世事に対応する義もあれば、時に対する義もあり、常々生きる上で守るべき義もある。変化に対処する義もあるが、その本を統括しているのは道義である。

仁と義はどんな時代にも変わることなき不易(真理)である。

今の世はこの不易の原理、原則が大変に希薄となっている。今年のNHK大河ドラマ天地人の直江兼続の精神の本にあるのはまさにこの「仁と義」である。換言すれば、仁愛と正義、天地の真理は厳しくもあり優しくもある。天地自然の恵みの中に生かされるわれわれは、大きな変革の時代にあつて全ての人びとが原点に立ち戻り自覚することである。

徳増省允

### 直観は神心

徳増省允

「直観は神心、いろいろと考えるのは人心」と言われている。

「機をみて敏、機を知る、それ神か」(易経)とも言う。

真理を素直に「心||魂」でうけとめる。これが「良知」即ち「良心」である。

人は皆、生まれながらにして平等に「良知」「良能」を与えられていることを自覚すべきである。それが真の己れ―真己であり「一人のわたし」に目覚るべきと思う。

神心でとらえた事々が物事を為すための機であり、その機に敏感に対処することが何より大切と言えよう。「人心」で判断したり行動することは、多くの場合に誤りをおかすことが多いように思われるからである。

佐藤一斎翁の言志四録、近江聖人といわれた中江藤樹先生の教学を説かれた故安岡正篤先生(平成

の年号を託して昭和五十八年十二月永眠)が『憂楽志』の中で「機を活せ」と言われているのは、まさに今日の日本国のあり方、将来にかゝる政治・経済界の指導層に対する強い警告といえる。

「君子は幾を見て作す。日を終ふるを俟たず」(易経)、この日本の危局を救う大機は、この際にある」と。

又「政府(政治家)は、祖国を守る思想信念の統一を達成し、政治を清潔にせねばならない。進んで世論の正しい指導に努力する。

外国に対して正義と独立の權威を守り、不当な交渉に対しては強靱な態度で善処する。外国の政治的謀略に影響されぬようマス・コミに留意し、特に青年や婦人を守ることに。道義心、愛国心を養う教育、学問、宗教、芸術を奨励する。民間各界の実力者及び有力団体は、積極的に祖国の独立と自由を守り、正論を国民に普及徹底する為に協力する」等々と。

このような視点からして、今の混乱し混乱する世相にあつて政治・経済・教育の指導層は、党利党略は言うにおよばず、自らの地位と収入の確保のために「偽」(いつわり)をなし「良心の呵責」もなく、誠のない言葉を発表し続けている、まさに不正な姿勢の連続とい

わざるをえない。

世の為人の為に誠実な行為行動を為しえず、国の指導層の精神的墮落は極限に致つていと思う。

物事の成敗には「機」が大切である。「機つかむ直観力」は事の成敗を左右するものである。

この「機をみる直観力」は真の己れを磨き上げ、その大切さを強く認識することであり、「良知」に致ることでもある。

私利私欲によつて濁つた己れに正しい直観は生まれてこない。

責任ある立場、指導的リーダー層ほど「機を知る」に敏でなければならぬのだから。

全国的に人気をよび、若い人たちから関心が高く話題となつた、NHK大河ドラマ「篤姫」の生涯のあり方も、天命(使命・役割)を悟り覚悟した信念に裏打ちされた直観力、ゆらぐことのない覚悟の行動が、人々の心に深く訴え、感動を与えたからである。若者たちの中にも十分に熱き思いをいだく本は存在していると信ずる。

現、世相で続発する不祥事の全ては精神の修養を軽視し、心の充実感を忘れて、形あるものゝ価値を追い求めてきた結果である。

人として最も根底(中核)にあるもの「心」のあり方を改善し、真の己に目覚めるしかない。

それは人が生れながら天より与えられた「良知」と「良能」の復活しかないことを一人びとりが知るべきである。今、その時にある。まさに「機をみて敏」と悟るべきである。

これからの時代は従来のような対症療法的小手先の対応では改善の為の意味をなさない。

将来に向かい、不善なるものを切り落とす覚悟と実践する勇氣が求められるからである。

国に社会に地域に現状を憂い、日本、否、世界の危機を強く認識して、「機」を逃さず、一人びとりが分に応じて行動し、勇氣をもって奮起する時である。

勇なるかな、勇なるかな

勇にあらずんば

何をもって行わんや 細井平洲

為せば成る 為さねば成らぬ

何ごととも、成らぬは

人の為さぬなりけり 上杉鷹山

この二つの教えは上杉家藩主、鷹山公と生涯の恩師である江戸嚶鳴館主、平洲翁の名言である。

「機を捕える」ためには、「機」を活かし展開すること、諸事に対し、ねばり強く、迫力をもって実践遂行するためには、「気概」である「氣」のエネルギーが必要であることは言うまでもない。

## 自分の信じたい道を真直に

心花プロジェクト責任者

市川雅子

先の見えない道を一步一步確かな足取りで生きていくには目をこらして道しるべとなるものに気付くことが大切であると感じます。そしてどのような変化が起きようとも根底には変わらぬものが流れていて、それを常に意識していることが自分らしく生きていくことに繋がるのではないのでしょうか。

「人生には何ひとつ無駄なものはない」。これが、私の根底に流れる想いであり、これをもとに『心花(しんか)プロジェクト』というプロジェクトを立ち上げました。心花プロジェクトとは、経験を活かし、また経験を重ね成長(進化)し、真の価値(真価)を輝かせ、心に強く優しい花(心花)を咲かせるための機会を創り出すことを目的としたプロジェクトです。特に若い方々にそのような場を、と考え活動を始めました。

こうした歩みの中、佐藤一斎の言志四録に出逢いました。ずしんと自分の中に確かな背骨が通った震え、この感覚を忘れることはできません。

目の前に差し出された言葉がいわんとする本当の想いを深い納得

と共に受け入れられるのは、言葉の受け手の側に共鳴する経験があったり初めてできることなのではないかと考えます。そのため、人生において様々な経験をし成長していくそれぞれの段階において静かに言志四録と向き合ったとき、気付くことはより多く、感じ入る深さはより深くなっていくのであらうと感じました。

そして『今の』私が素直な心で一斎の言葉に向き合った時、二つの条文の前で引き込まれるように足を止めました。

「一燈を提げて暗夜を行く。暗夜を憂うることなかれ。ただ一燈を頼め。」(言志晩録十三条)

この意を『今の』私は次のように捉えます。どのような失敗をしようともその「経験」は人生のいつかの季節で花開く。そう信じ暗夜であるからこそ自分を鍛えるチャンスであるという自覚をもって己を頼りに進めばよいと。さらに「私欲はあるべからず。公欲は無かるべからず。公欲なければ則ち人を恕する能わず。」(言志録二百二十一條抜粋)

自分の足下を照らす一燈の灯からふと顔を上げて、灯を必要とする人の足下に「よろしければどうぞ」と灯を差し向ける心。この条文により私は、『これから』プロ

ジェクトを進める道の先に射す光を見た気がしました。

一斎が言わんとした想いを今の世に活かしたい。書物の中の文字として存在するのではなく、魂をもつ言葉として多くの方々の心に触れたい。そして、暗闇をゆく足下をすつとあたたく照らす「灯(ともしび)」となりたい。

このような想いに至り、一斎の言葉を今に活かす一つの方法として舞踊という形により表現したいと考えました。この私の想いに熱い心と温かい手を携えて下さった方々のお力添えにより、小さな、けれど根は強く大きく張った希望の芽がこの大地に高い太陽を仰ぎ見るように顔を出しました。

ここに心花プロジェクト第一弾「一斎企画」が始動しました。幕末の混乱期、広く全体を見据えた上で個の役割を認識し、覚悟と信念をもって道を切り拓いたこの国の先人の教えを道しるべとして。

佐藤一斎没後百五十周年を迎えた本年、一斎の言葉、そして一斎と同じ時代、一本道を生き抜いた篤姫を描いたNHK大河ドラマの音楽の追い風を受けながら、今を生きる一人ひとりの心に向かって想いを込めて舞います。

この作品の過ぎし道に、花が咲きますように。

「言志四録講読会」余話

副理事長 鈴木 隆一

「歴史を学ぶ人は多いが、歴史から学ぶ人は少ない」と聞いたことがあります。

この三月で一四三回目を迎えた言志四録講読会ですが、佐藤一齋や言志四録そのものを学ぶために続けて来たわけではありません。

平成七年七月から毎月一回の割で、特に講師をお願いするわけでもなく、講談社学術文庫の言志四録(1)~(4)(川上正光全訳注)をテキストに学習会を始めて十四年になります。一回の学習会でわずかに二、五条ぐらいずつしか進みません。先導者に続いて全員で朗誦したのち、語意、訳文、付記などを読み、その一文について参加者が思い思いの意見やら感想を述べ、話の尽きたところで次へ進む…という形で会が続いております。

「字無きの字を読め」と一齋先生は書き残していますが、この一言を取り上げて、サラリと受け流す者、ズシンと心奥深く受け止める者、人それぞれでしょうが、他人の話しを聞くことがどれだけ自分の心を豊かにし、人としての幅を広げて行くか計り知れませんが、こうして、私たちは言志四録を通じて、よりよい人の在り方、生き方を学んでいます。

これこそ、「歴史から学ぶ」とであり、学んだことが今に活かすことになりませう。

一方で、一齋先生や言志四録にかかわるエピソードや疑問が話題になる時があります。

(その一) 文政十二年(一八二九)、一齋先生の「愛日楼文詩」四巻が出版され、翌年、この愛日楼文詩と一緒に「言志録」(文政七年刊行)を伊勢の宮崎文庫へ奉納した。江戸から伊勢へは船便に託したが、途中台風に遭い船が覆没したものの漂着した荷物は無事地元の人の手によって納められた。

(先日、現在の伊勢文庫へ問い合せたところ、稀少本として大切に保管されているとのこと。ぜひ一度お目にかかりたいものです。)

(その二) 「言志後録」の一六六で、川上先生によれば、「不才な君子と多才な少人」の項で、「癸酉王月下漸識るす」とあるが、「癸酉の酉は巳の誤り」とある。

癸酉は文化十年(一八一三)、癸巳は天保四年(二八三三)だが、一齋先生のような人が間違えるはずがない。どうも下書きから正書したときに書き間違えたのではないかと云われているが、当時の出版元が版木を彫る段階で間違えたのでは…とも。

歴史から学んだり知識を増やすことも楽しいものです。

最も古くて最も新しい

日本人の知恵袋「江戸しぐさ」

会員 杉浦 敏子

恵那市民講座とNPO法人いわむら一齋塾の共催で、「江戸しぐさ」の講演が講師に沼田玲子先生(NPO法人江戸しぐさ会員・全日本作法会教授)をお招きし三回に分けて開催されました。

第一回、江戸しぐさ(思草)とは越川禮子著「江戸繁盛しぐさ」の中より、思いやり、心の大切さ、人々が仲よく楽しく暮らしていく指針としての八百余の江戸しぐさがあり、例えば喫煙のしぐさ(吸わない人の前では吸わない)喧嘩のしぐさ(ルールを守る)等。

第二回、商業八訓と江戸小町の商人の心得(客の気持ちをも大切に。返品された時は売る時より親切に。小遣いは一文より記す)等々八訓の心得。江戸の商人は利益は世の中に還元し人を育てることが大切であると。江戸小町とは、道理をわきまえ小粋、小綺麗、小確りして創意工夫ができる人等。

第三回、寺子屋物語。「三つ心六つ躰、九つ言葉、十二文、理十五で未決まる」とそれぞれ説明があり寺子屋の目的、手習、師匠の話、人の基礎作り等、世の中どんなに変わろうとも人として大切な事は後世まで伝えていかなければと痛感しました。

特別公開講座

「いわむら一齋塾」を終えて

NPO法人いわむら一齋塾は、郷土の先人の教えを活かし、「人づくり心そだては、まちづくり」を基本理念に活動しています。

その具現化のひとつの事業が、特別公開講座です。

本年度も幅広くテーマを設定し、多くの方々に楽しく聴講していただきました。

- ・ 七月二六日 振り込め詐欺、悪質商法と金融トラブル防止について講読 酒井隆信先生
- ・ 八月二三日 読み聞かせて下さい 講読 磯部彰先生
- ・ 九月六日 日本文化再考〜イギリス研修から見た日本〜 講師 桐井雅康先生
- ・ 一〇月一八日 観光地の賞味期限 講師 古池嘉和先生
- ・ 一〇月二五日 一齋先生「老いの戒め」〜養生(ようせい)と身後の工夫〜(「言志祭記念講演会を兼ねる」) 講師 近藤正則先生
- ・ 十一月二二日 下田歌子の生い立ちと人となり 講師 丸山幸太郎先生
- ・ 一月一七日 最も古くて最も新しいマナー(江戸しぐさ) 講師 沼田玲子先生

佐藤一斎歿後150年祭カレンダー テーマ「大人たちが学ぶべきことー親学…」

10月

嚶鳴フォーラムin恵那

10月23日(金)

会場/恵那峡グランドホテル
13:30~17:00 嚶鳴フォーラムin恵那
=市長サミット
18:00~19:30 ふるさと先人交流会(有料)

- ・アトラクション
心花(しんか)一斎の教えと現代舞踊
岩村城女太鼓

10月24日(土)

視察研修会/恵那~岩村~恵那文化センター
9:00~13:00 言志祭~佐藤一斎まつり~
岩村歴史資料館->藩校「知新館」->
町並み見学->昼食->恵那文化センター

会場/恵那文化センター
13:30~16:00 佐藤一斎歿後150年祭
嚶鳴フォーラムin恵那
記念イベント

- ・アトラクション・サミット宣言
・記念講演 茂木健一郎先生(脳科学者)
・トーク
テーマ【大人たちが学ぶべきこと、親学…】
出演者/童門冬二氏(作家)、
田淵久美子氏(脚本家)、



7月

7月18日(土)

一斎塾

13:30~
会場/ちこり村(中津川市)
講師/吉田公平先生
「陽明学からみた
佐藤一斎の人となり」

8月

8月2日(日)

夏休み親子体感塾
佐藤一斎学習会

9:30~
会場/岩村公民館
講師/鈴木隆一先生
「親子で学ぶ言志四録」

9月

9月6日(日)

一斎塾大阪講座

13:00~
会場/大阪大学 中之島センター
(大阪市北区中之島)
講師/神渡良平先生
「西郷隆盛と佐藤一斎」

【お問い合わせ先】

恵那市教育委員会

TEL 0573-43-2112(代)
FAX 0573-43-4137

4月

4月12日(日)

一斎塾

13:30~
会場/恵那文化センター
講師/鈴木隆一先生
徳増省允先生
「一斎学に学ぶ心のありよう
~今、求められる大人の覚悟~」

5月

5月4日(月)

一斎塾東京講座

13:00~
会場/湯島聖堂講堂
(東京都文京区湯島)
講師/窪田哲夫先生
「佐藤一斎『言志四録』
今求められること。」

6月

6月27日(土)

歿後150年祭
名古屋大会
プレ嚶鳴フォーラム

13:30~15:00
会場/名古屋港ポートビル 講堂
(名古屋市港区港町)
・アトラクション
岩村町少年少女雅楽演奏
・心花(しんか)
一斎の教えと現代舞踊
・童門冬二先生・吉田公平先生
公開学習会

NPO法人
「いわむら一斎塾」がめざすもの

二十一世紀を生き抜く教養豊かな人材と指導者を養成するために、郷土が生んだ幕末の偉大な碩学佐藤一斎翁の教えを基本理念として、広く高い見地から多様な学習と修養の場作りに関する事業を行い、子どもから大人まで幅広い層に至るまでの「人づくり」「心そだて」及びそれを活かしたまちづくりの推進に寄与することを目的としています。

あとがき

春の訪れを感じ始める頃準備に取り掛かった塾報第六号が漸く完成し、皆様にお届けできる運びとなりました。各先生方、そして「心花」プロジェクトの市川様、寄稿にご協力頂きまして誠に有難うございました。

今年、一斎先生の歿後百五十年に当り、合わせて催される嚶鳴フォーラムの行事予定を塾報に載せました。四月から十月下旬まで沢山の行事が開催されます。一人でも多くの方に読んで参加頂けたら嬉しく思います。

年二回の発行ではありませんが、編集者一同心を込めて頑張っております。今後共ご協力よろしくお願ひします。